

姫路城でレディオガガ

かつて姫路城跡には、城とは無関係の施設もありました。それらについてすべて記録が残っているわけではなく、わからなくなってしまったモノも少なくありません。今号ではその1つを紹介します。

まず、この集合写真(写真1)からご覧いただきましょう。撮影時期は、背景の姫路城天守と素屋根解体状況から、「姫路城昭和の大修理」当時であることがわかります。修理を終えた真新しい天守が最上階から少しずつ姿を現している時期で、その東麓にある搦手の内船場蔵跡で撮影されたものです。中央の眼鏡をかけた人物が工事主任だった加藤得二さんで、その周囲は工事の職人や事務員さんたちです(女性もいました)。



写真1

このとき彼らが集まったのは“運動会”をするためでした。例えば、写真2は目隠しをしたまま歩く競技。詳しくはわかりませんが、スタート地点から目隠しをして歩いて風船を割るという競技のようです。綱のラインを越えたら失格なのでしょう。まるでゾンビのような歩き方の人もいます。そのほかに定番球技のソフトボールもありました(写真3)。この2枚の写真に共通して写りこんでいるモノが、今号の主演です。

写真3を見ると、お城の櫓を模したような建造物が建っているのがわかります。実はこの建造物は公衆用聴取施設と言って、現代風に言うとパブリックリスニング用施設というところでしょうか。つまり、ラジオ放送を多くの聴衆を集めて聴かせるための施設で、「ラヂオ塔」と呼ばれていました。昭和5年(1930)、NHK大阪放送局が天王寺公園に設置したのが最初で、その後、各地に設置されるようになったといわれています。

ラヂオ塔の形状は各地で異なっていました。基本的な仕組みは受信機とスピーカーが組み込まれ、ボタンを押すと音声が聴こえるというもので、周囲の人間の大きさと比較



写真2 (←がラヂオ塔)

すると、案外大きな建造物だったことがわかります。

幸い写真2・3によって姫路城跡にあったラヂオ塔の外観がわかりますので、詳しく見てみましょう。

写真3を見てください。石垣の上に建つ2層櫓となっていて、全体的に城郭建築を意識しています。周囲の人間と比べると、石垣部だけで1.5mはありそうです。櫓部は石垣部と同じような高さなので、全体で3m程度はあったでしょう。

次に櫓の2層目を見てみますと少なくとも3面が開口しています。そして、下の1層目は手前が開口していますが、その内部に光が差し込んでいないので、開口部はここだけだったとみられます。側面は城らしいデザインにするため格子窓のような造りにしたのでしょう。

写真2を見てみると、2層目が4面開口だったことを確認できます。2層目にスピーカーが納まっていたことは間違いなさそうです。とくに2層目の開口部は、写真3のそれよりも大きく見えます。これは正面側の開口部になるためでしょう。聴衆の存在を前提とすれば、塔は広場のある北西方向を向いていたはずだからです(写真4を参考)。また写真2で1層目に小さな縦長の穴が確認できます。これは受信機のボタンがあった穴とみられ、その背後に受信機が格納されていたのでしょう。

現在、兵庫県内では明石市と神戸市の2ヶ所にラヂオ塔が残っていますが、かつて姫路城跡にも城を模したラヂオ塔が存在したのです(香山宏+高田徹『絵葉書の中の城154回姫路城(その5)』2017)。

しかし、そのラヂオ塔もいつの間にか撤去され、一部の人の記憶に残るだけとなりました。

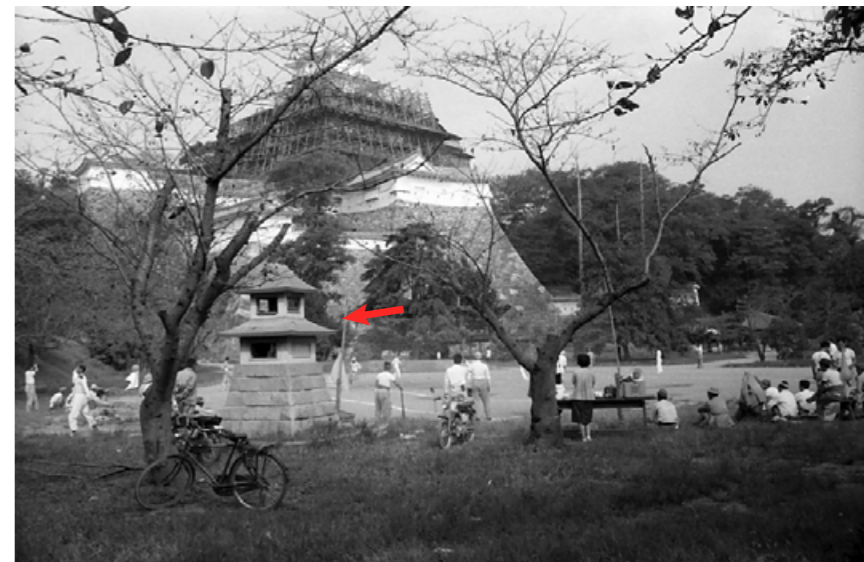


写真3 (←がラヂオ塔)



写真4 (天守から見下ろした内船場蔵跡。○がラヂオ塔)